のなきに、まぢかきほどなれば、たよりにもと思ひてせうそこし聞えつるなり、そのむねは、かくて侍るこそは本意ある事と思ひ、こゐんの去おかせ給へる事をたがへたてまつらむも、かたがたにはゞかり思はぬにあらねど、かくてあるなん思ひつゞくるにつみふかくもおぼゆる、うちの御ゆくすゑはいとはるかにものせさせ給ふ、いつともなくてはかなき世にいのちも去りがたし、このありさまのきて心にまかせておこなひをもし、物まうでをもし、やすらかにてなんあらまほしきを、むげにさきの東宮にてあらむは見ぐるしかるべきなん、いんがう給ふて、としに受領などありてなんあらまほしきを、いかなるべき事にかとつたへ聞えられよとおほせられければ、かしこまりてまかでさせ給ひぬ、そのよはふけにければ、つとめてぞ殿にまゐらせ給へるに、〇略中東宮にまゐりたりつるかととはせ給へば、よべの御消息くはしく申させ給ふに、さうなりや、おろかにおぼしめさんやは、おしておろしたてまつらむ事はゞかりおぼしめしつるに、かゝる事のいできぬる、御よろこびなほつきせず、まづいみじかりける大宮〇上東門院の御宿世かなとおぼしめす、民部卿〇源俊賢殿に申あはさせ給へば、たゞとく〳〵せさせ給ふべきなり、なにかよき日もとらせ給ふ、すこしものびばおぼしかへして、さらでありなんとあらむをばいかゞはせさせ給はんと申させ給へば、さる事とおぼして、御こよみ御らむずるに、けふもあしき日にもあらざりけり、やがて關白殿〇藤原頼通もまゐらせ給へるほどに、とく〳〵とそゝのかし申させ給ふ、まづいかにも大宮に申てこそはとて、うちにおはしますほどなればまゐらせ給ひて、かくなんときかせたてまつらせたまへば、まして女の御心はいかゞはおぼしめされけん、それよりぞ春宮にまゐらせ給ふ、かう申事は寛仁元年八月六日の事なり、〇略中母の宮だにも去らせ給はざりけり、かくこの御方に物さはがしきを、いかなる事ぞとあやしくおぼしてあないし申させ給へぞ、れいの女房のまゐるみちをかためさせ給ひてけり、殿にはとしごろおぼしめしつる事な